宮崎大学学術情報リポジトリ
University of Miyazaki Academic Repository

小学校における学校規模ポジティブ行動支援（SWPBS）の実践方法に関する研究

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 宮崎大学教育学研究科教職大学院
	公開日: 2023-06-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 安治川, 洋平, 竹内, 元
	メールアドレス:
	所属: 宮崎大学
URL	https://doi.org/10.34481/0002000007

小学校における学校規模ポジティブ行動支援（SWPBS）の実践方法に関する研究

安治川洋平[i]・竹内元[ii]

要旨

本研究の目的は、小学校における学校規模ポジティブ行動支援（以下、SWPBS と示す）の実践方法について、先行実践校の実践上の問題・課題を調査・分析し、勤務校の実践に役立てることである。まず、先行実践からの３つの特質を理解した。ただ、SWPBS を実践する際の問題や課題は明らかにされなかった。そこで、本県で SWPBS の先行実践を行っている３校の担当者にインタビューを行い、分析を行った。その結果、SWPBS の３つの特質を理解できたとしても、それらをクロスさせて理解し、実践していくことに難しさがあることが明らかになった。また、今後の生徒指導の捉え方に考えを転換した上で SWPBS を実践していく必要があることも分かった。SWPBS は、「組織的な研究実践であり、生徒指導の今後の在り方を捉え直すものである」とする点を、全教職員が納得感を得るような分かりやすい形で伝える研修を行うことが今後の課題である。

１．研究の背景と目的

⑴　社会的背景

「SW」とは、School Wide（学校全体）、「PBS」とは、Positive Behavior Support（ポジティブ行動支援）の略称である。アメリカのオレゴン州で始まった学校規模ポジティブ行動支援 SWPBS（以下、SWPBS と示す）の取り組みは、アメリカの多くの学校に導入されており、問題行動の減少や学力の向上、学校風土の改善などの効果が示されている。最近では、日本でも SWPBS の実践が報告されるとともに、徳島県などが自治体として SWPBS を導入するなど、実践が広がりつつある。

宮崎市は、不登校児童数や学習面や行動面で著しい困難がある児童生徒数など、学校生活への不適応を感じる児童が増加傾向である。そのため、宮崎市教育委員会は、2026 年度から SWPBS を全小中学校に導入し、生徒指導に関する対応を組織的に行うことを通して、教師や児童生徒が過ごしやすい学校環境を整えていく予定である。

⑵　研究の目的

SWPBS には３つの特質がある。

１つめは、「ポジティブな行動の価値付け」である。これまでの生徒指導は、問題行動を起こす児童に対して目が向き、叱責や制裁的な指導が行われてきた。この事後的生徒指導では、教師側から見た児童の「困った行動」が減っていくとは言えず、むしろ増加する傾向にある。さらに、問題行動が増えることで、教師側の負担が大きくなり、疲弊してしまうことが考えら

[i] 宮崎市立那珂小学校

[ii] 宮崎大学教育学部附属教育協働開発センター

れる。そうではなく、問題が起こる前の予防的生徒指導として、ポジティブな取り組みを行うことが求められている。児童の望ましい行動を育て、引き出すためのシステムとして、SWPBS が導入されようとしているのである。

2つめは、「三層構造による支援体制」である。SWPBS では、児童の支援を三層に分けて行っていく。全ての児童が対象の「第 1 層支援」、注意を要する児童やグループが対象の「第 2 層支援」、緊急性の高い児童が対象の「第 3 層支援」である。これまでの学校現場では、第 2 層・第 3 層の「望ましい行動ができていない児童」を注意する方法が取られてきた。そうした指導では、教師に対して反抗的になったり、教師との信頼関係が崩れていったりして、負のスパイラルへと陥り、学級経営がうまくいかなくなる可能性がある。SWPBS では、望ましい行動を認めたり、正しい方法を教えたりすることによって、第 1 層支援を充実させることに重点をおく。そうすることで、第 2 層支援対象の児童に対して、個別や小集団での支援が行いやすくなる。また、第 3 層支援の児童には、教職員だけでなく、保護者や専門家も関わりながら、より的確な方法を協議して個別の支援を行うことができる。第 2 層・第 3 層支援の児童を見つけやすくし、支援を充実させるための方法ともいえる。

3つめは、「応用行動分析に基づく ABC 分析」である。児童の行動を A（きっかけ・状況）・B（行動）・C（結果）に分けてデータをとることで、児童への支援の改善を図ることが容易になる。支援をそのまま継続すべきか、それとも支援内容を改善すべきか判断するために、問題行動の頻度や持続時間が減っているか、または望ましい行動が増えているかを確かめることが非常に重要であり、そのためには、客観的データを活用した分析が有効である。

上記の特質にある「ポジティブな行動の価値付け」及び「三層構造による支援体制」については、勤務校においても実践を行っている。また、「応用行動分析に基づく ABC 分析」についても、夏休みの研修において、筆者が全教職員に具体例を挙げながら説明を行っている。そのため、勤務校において全教職員は、SWPBS の 3 つの特性を理解している。しかし、実際に実践を行ってみると、SWPBS を指導の改善方法と理解してこれまでの取り組み方を変えられる教員と、これまでの取り組み方を変えずに SWPBS を実施しようとする教員に二分されることが明らかになった。SWPBS の組織的な実施は思うように進んでいない現状がある。

ところで、先行実践事例校として、大阪府寝屋川市立啓明小学校（栗原 2018）がある。具体的な実践が 2 つ紹介されている。

1 つめは、ポジティブ行動支援（PBS）を学級に導入するための方法を提案している。学級でステキな行動を増やしていくために、ABC 分析を行い、A（きっかけ・状況）と C（結果）の工夫を意識した取り組みを行っていた。「ステキな行動チャート」を作成して実践することで、ポジティブ行動支援（PBS）で重要な「データに基づいた取り組みを行う」ための方法を紹介した内容である。ポジティブな行動を価値付けるために児童の行動分析を行い、ステキな行動を視覚化するチャートを作成した上で実践だった。

2 つめは、学級における第 1 層支援の取組を、学級全員で大切にしたいことについて考え、「学習」「友達」「安全」の 3 つに決定してから行動チャート「クラスで大切にすること」として整理している。特に「学習」において、授業の初めの切り替えと準備、そして授業中の聞く姿勢を大切にする「グーチャレンジ」にクラス全員で取り組んでいくという内容である。全員参加を促すことを児童ら自身が決めて実行していた。なかなか参加が難しい児童を第 2 層支援として捉え、教師が個別の支援を行っていくのである。

先行実践は、実践内容の成果は示されているものの、実践方法の改善を指摘しているものは、管見の限り見られなかった。そこで、本研究では、SWPBS を実践する上でどのような問題に直面するかを明らかにするため、宮崎県内における SWPBS の先行実践校にインタビュー調査を実施することとした。

２．研究の方法

各学校において先行実践年数が異なるよう、調査対象を選定した。インタビュー調査の概要は、以下の通りである（表 1）。以下の担当者に行ったインタビューを基に、分析を行った。

表 1：インタビュー調査の概要

項目	A 中学校	K 小学校	N 小学校
担当者	Y 教諭	K 教諭	M 校長・S 教諭
校務分掌	生徒指導主事	特別支援教育コーディネーター	校長・研究主任
先行実践年数	3 年目	2 年目	1 年目
実施日	令和 4 年 7 月 25 日	令和 4 年 11 月 27 日	令和 4 年 12 月 7 日
時間	1 時間	1 時間	各 1 時間

３．結果

3 校 4 名へのインタビューを行った結果、「望ましい行動を褒める一方で、問題行動に対して事後対応になっている現状がある。」や「活動に積極的に参加しなかったり、トークンを獲得することが難しかったりする児童への対応が気になる。」という意見、「第 2 層・第 3 層支援の支援方法がわからないから困っている。第 1 層支援ばかり行うのはどうかと思う。第 2 層・第 3 層支援の立場に置かれた児童の支援をどのように行えばよいか教えて欲しい。」という現場の問題・課題が出された。こうした聴き取り内容から、SWPBS の特質に対応する実践課題を整理した（表 2）。

表 2：SWPBS の特質と実践課題

番号	SWPBS の特質	実践課題
①	ポジティブな行動の価値付け	問題行動を減らそうとすることはなくなるが、褒めればいいと捉えてしまう
②	三層構造による支援体制	気になる子に目を向けなくはなるが、ある基準に子どもを到達させようとする
③	応用行動分析に基づく「ABC 分析」	経験から子どもの問題行動を捉え事後的に対応することはなくなるが、気になる子への対応を優先したくなる

上記の表を横軸で見たとき、SWPBS のそれぞれの特質は理解できるため、教職員の指導観には変容が生まれると推察される。しかし、それと同時に他の特質の意識も働いている。例えば、①の「ポジティブな行動の価値付け」を教師が意識することで、問題行動を減らそうとするのではなく、ポジティブな行動を増やそうとする行動が生まれる。しかし、同時に③の「ABC 分析」をしなければならない、という意識も働くため、褒めることだけで児童の行動を強化しようとしてしまうのである。また、②の「三層構造による支援体制」を意識すること

によって、児童の望ましい行動を見るようにはなるが、①の「行動の価値付け」もしなければならないという意識から、自分自身が決めた規準で評価を行ってしまうことになりかねない。③においても同様で、理論に基づいた予防的な生徒指導を行うことは理解しているが、②の「三層構造」の第 2 層・第 3 層支援の児童に意識が向きがちになってしまう。SWPBS の研究実践においては、3 つの特質を同時進行で実践していくことに手いっぱいで、3 つの特質をクロスさせた構造理解と実践を行うことに困難さがあることが明らかとなった。

4．考察

このことから、SWPBS の 3 つの特質を構造的に理解するためには、これまでの生徒指導の手法を、SWPBS が目指す今後の生徒指導に意識を転換することが必要であると考えた（表 3)。また、実践を促していくためには、これまでの生徒指導と対比させることで、SWPBS が目指す生徒指導の方が、教師や児童にとっての「よりよい学校環境に変えるために行う」という価値をもつことができると考えた。

表 3：これまでの生徒指導と SWPBS が目指す今後の生徒指導の相違点

項目	これまでの生徒指導	SWPBS が目指す生徒指導
生徒指導の考え方	問題行動を減らそうとする	ポジティブな行動を増やそうとする
問題行動への対応	叱責・制裁的な指導	ポジティブな介入
指導の介入方法	経験から	理論から
教師の指導の根拠	主観的なデータ	客観的なデータ
指導メンバー	個人(学級担任が主に関わる)	チーム(学校全体で関わる)
指導内容の判断	直観重視(その場での判断)	熟議を重視(関係者が論議し決定)
フレームワーク(枠組み・構造)	問題を起こしたから生徒指導が入る「反応型」	問題が起こらないように学校自体が何をできるかという視点で考えていく「プロアクティブ型」
個別指導介入計画	児童本人を変えることを目的	環境デザインの再検討を目的
生徒指導に対する教師の意識	原因に応じた対策を考えるという「問題対処型」	何が魅力的で子どもが学校に登校してきているのかという「学校の魅力追究型」

（栗原慎二『PBIS 実践マニュアル＆実践集』ほんの森出版、2018 年を基に筆者が作成）

SWPBS の実践で目指す、児童の「ポジティブな行動を増やそうとする」行動のためには、まずは教師が変容する必要があると考える。これまで経験から指導介入を行っていたものを、児童の行動を観察したり、数値として表すことができる具体物を提示したりして、データを収集した上で分析を行う。その分析を基に、学級や学年、学校全体の児童に必要な支援を行っていかなければならない。そうすることで、実践課題として挙げられた「褒めればいい」という行動は減少していくはずである。また、SWPBS を研究として行うため、分析や支援の方法については、「個別でなく組織的に行う」ことが大切である。

さらに、「三層構造による支援体制」を基にして、組織的に支援を行っていくためには、内容を職員会議等で全教職員の合意形成が必要である。その際に意識すべきは、児童本人を変えることを目的とするのではなく、「環境デザインの再検討」を目的としていることである。その中で、期待される行動を強化したり、問題行動に対処したりするシステムについても話し合う。その上で具体的実践を行っていくが、第 1 層支援という枠組みで全ての児童に対して支援

を行うことは、「学校環境をより良くするために望ましい行動を定着させていくこと」や「社会で必要とされる望ましい価値観を共有していくこと」につなげるもの、ということを共有しなければならない。さらに、期待される行動を具体的に指導することについて、「どのような行動を認め、褒めればよいのか」や「具体的に指導する内容」が組織的に話し合われているため、経験の少ない若手教員にも取り組みやすい内容となっている。望ましい行動を認めるだけでなく強化していく言葉がけとして、「褒め言葉＋価値付け」をするということが具体的な指導として合意形成されていれば、全ての教職員が、同様の言葉がけを意識して行えるのである。若手教員にとっては、生徒指導のスキルとして獲得することにもつながる。さらに、指導を受ける児童側も内容に一貫性が生まれるため、納得感を得ることができると考える。そうすることで、教師側の「ある規準に子どもを到達させよう」という課題は転換されると考える。

加えて、「応用行動分析に基づく『ABC 分析』」については、結果が肯定的である場合と否定的である場合とで分けて考える必要がある。

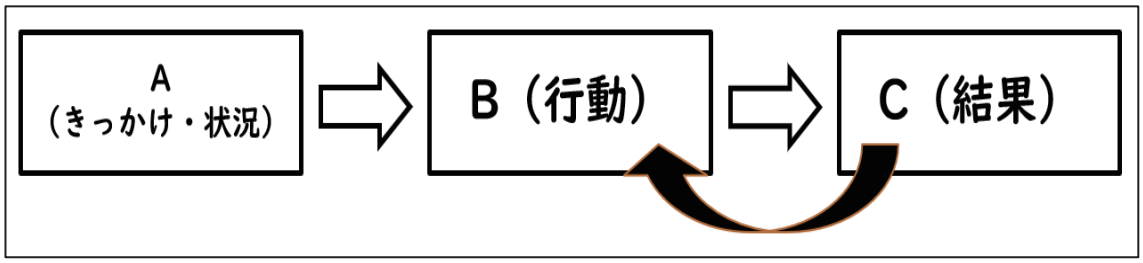

図 1：結果が肯定的である場合の ABC 分析

この ABC 分析は、B（行動）に対して、C（結果）で褒められたり認められたりするという強化が行われているという理解である（図 1）。そうすることで、次も同じ行動をすると、褒められたり認められたりすることが継続し、児童自身の成長や望ましい行動の定着に繋がっていく。

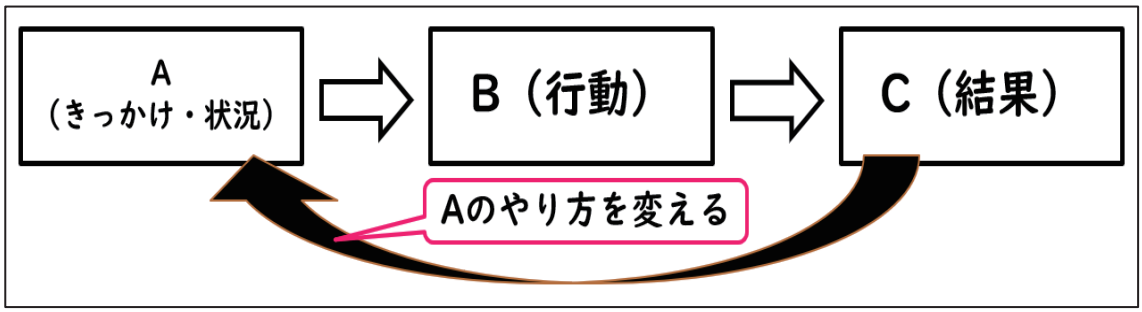

図 2：結果が否定的である場合の ABC 分析

結果が否定的な場合の ABC 分析は、B（行動）に対して、C（結果）として、教師から注意を受けるのみという構図となっていた。そうではなく、まずは行動の制止が安全上必要となる。次に、例えば、「なぜ教室から出ていったのか」「どうして席を立ちたくなったのか」等の行動の理由を尋ねるようにする。その後、望ましい行動に間違い（誤学習）があれば正しい行動を教える。その他の理由がある場合は、その理由に沿って、A（きっかけ・状況）を教師側が変える必要が出てくる。つまり、児童が起こした否定的な行動を、学校環境をよりよく改善していくためのきっかけとして捉えるべきなのである。A（きっかけ・状況）のことを教師がしようとした場合に、児童がどのような反応や行動を起こすかをイメージしたり見通したりする意識を、常にもつことが大切である。

５．まとめと今後の課題

本研究では、SWPBS の 3 つの特質を理解できたとしても、それらをクロスさせて理解していくことに難しさがあることが明らかとなった。

SWPBS の実践で目指す、児童の「ポジティブな行動を増やそうとする」行動のためには、まずは教師が指導観を変容する必要があると考える。児童の行動を観察し、データを収集した上で分析を行う。その分析を基に、学級や学年、学校全体の児童に必要な支援を行っていかなければならない。そのためには「個別でなく組織的に行う」ことが大切である。

加えて、「三層構造による支援体制」を基にして、児童本人を変えることではなく、「環境デザインの再検討」を行い、学校環境をより良くするために望ましい行動を定着させていく」ことや「社会で必要とされる望ましい価値観を共有していく」意識が必要である。

それから、「応用行動分析に基づく『ABC 分析』」については、結果が肯定的な場合と否定的な場合を分けて考える必要があり、児童が起こした否定的な行動を、学校環境をよりよく改善していくためのきっかけとして捉えることが重要となる。

今後、SWPBS の実践を導入するにあたっては、「ポジティブな介入によってポジティブな行動を増やしていく」こと、「客観的データを駆使する」こと、「個別でなくチームで行う」ことを教職員が意識して実施していく考え方の転換が必要である。さらに、「教職員全員が当事者となり組織的な研究を行っていく」ことや、「児童の参画を促す工夫を取り入れ、楽しみながら学校環境を整えていく」ことを意識していくことが大切となる。

最後に、本研究の課題を述べる。本研究で明らかになったように、SWPBS は、組織的な研究実践であり、生徒指導の今後の在り方を捉え直すものである。こうした点を、全教職員が納得感を得るような分かりやすい形で伝える研修を行うことが今後の課題である。

引用・参考文献

田村知子・村川雅弘・吉冨芳正・西岡加名恵（2016）『カリキュラムマネジメントハンドブック』ぎょうせい。
栗原慎二（2018）『PBIS 実践マニュアル＆実践集』ほんの森出版。
有川宏幸（2020）『教室の中の応用行動分析学―その「行動」には理由があるー』明治図書。